

Title	氷期に生きた北の狩人：慶應旧石器時代研究88年の歩み： 文学部創設125年記念企画展
Sub Title	
Author	佐藤, 孝雄(Satō, Takao) 安藤, 広道(Andō, Hiromichi) 渡辺, 丈彦(Watanabe, Takehiko)
Publisher	慶應義塾大学民族学考古学研究室
Publication year	2016
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO10007004-00000002-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文学部創設一二五年記念企画展

氷期に生きた北の狩人

― 慶應旧石器時代研究八八年の歩み ―



慶應義塾大学民族考古学研究室

ごあいさつ

慶應義塾大学文学部は、2015年に創設125年を迎えました。この節目を記念して私たちは、2015年1月から2015年度末まで、多彩な記念行事を企画してきております。1980年の慶應義塾・大学部・文学部開設以来の125年の歩みのなかで、私たちは、人間がつくりあげてきた叡智と文化、社会や環境にかかわる多様な分野で活発な研究教育活動にとりくんできました。さまざまに繰り広げられてきた一連の記念行事のなかで、私たちは125年の軌跡を振り返るとともに、新たな文学部の未来を展望しました。そのなかで明らかになったのは、文学部の研究教育、そして社会的貢献の諸活動は、言わば広大無辺の時間と空間の交差のなかで、世界の多様性と躍動、そしてそれを成り立たせている根幹を把握しようとする遠大な知的冒険の試みである、ということです。

今回ご案内する慶應義塾大学文学部創設125年記念企画展「氷期に生きた北の狩人―慶應旧石器時代研究88年の歩み―」では、文学部民族学考古学研究室が1980年代から着手してきた東北地方の発掘調査によって収集された旧石器時代資料約9万点のうち、特に学術的価値の高い資料をご覧いただく予定です。さらに近年新たに発見された大山柏・相澤忠洋関連資料を展示し、慶應義塾の旧石器時代研究の黎明期から今日に至る約88年間の歩みが紹介されます。また展示期間中には、ギャラリー・トークや講演会も予定されています。

ちょうど1年前、文学部創設125年記念事業の第1弾として、記念企画展「語り出す南洋の造形―慶應大所蔵・小嶺磯吉コレクション―」（2015年1月9日～2月7日）が開催されました。それもまた民族学考古学研究室の主催によるものでした。奇しくもこの二つの展示企画にはさまれる形で、一連の文学部創設125年記念事業が展開されたことは象徴的です。まさに広大無辺の時間と空間の交差のなかで世界を把握しようとする私たちの知的冒険の姿が、ここに凝縮されているように思われます。

本展示を通して、旧石器時代に思いをはせるとともに、慶應義塾大学文学部、そして民族学考古学研究室の知的冒険の旅に同道していただければ、と存じます。

慶應義塾大学文学部長 松浦良充

開催にあたって

慶應義塾大学民族学考古学研究室では故阿部祥人教授の指揮のもと、1980年代より東北地方で旧石器時代遺跡の発掘調査を重ねてきました。その結果得られた考古資料は石器を中心とし既に9万点以上を数えます。当研究室における旧石器時代研究の礎が、阿部教授と東北地方で展開された一連の調査によって築かれたことは衆目の認めるところだと思います。もっとも義塾における旧石器時代研究の端緒は、大山柏博士が「基礎史前学」を開講された88年前に遡ることができます。当研究室が所管する収蔵庫の一角からは、近年、この大山博士さらには岩宿遺跡の発見者たる相澤忠洋氏に関わる新資料も発見されています。

文学部創設125年の節目を記念する本企画展では、慶應義塾の旧石器時代研究88年の歩みを振り返る上で、特に重要な遺物群を選びすぐって展示します。展示資料を通して、最終氷期の列島北部における人々の営みに思いを馳せていただければ幸いです。

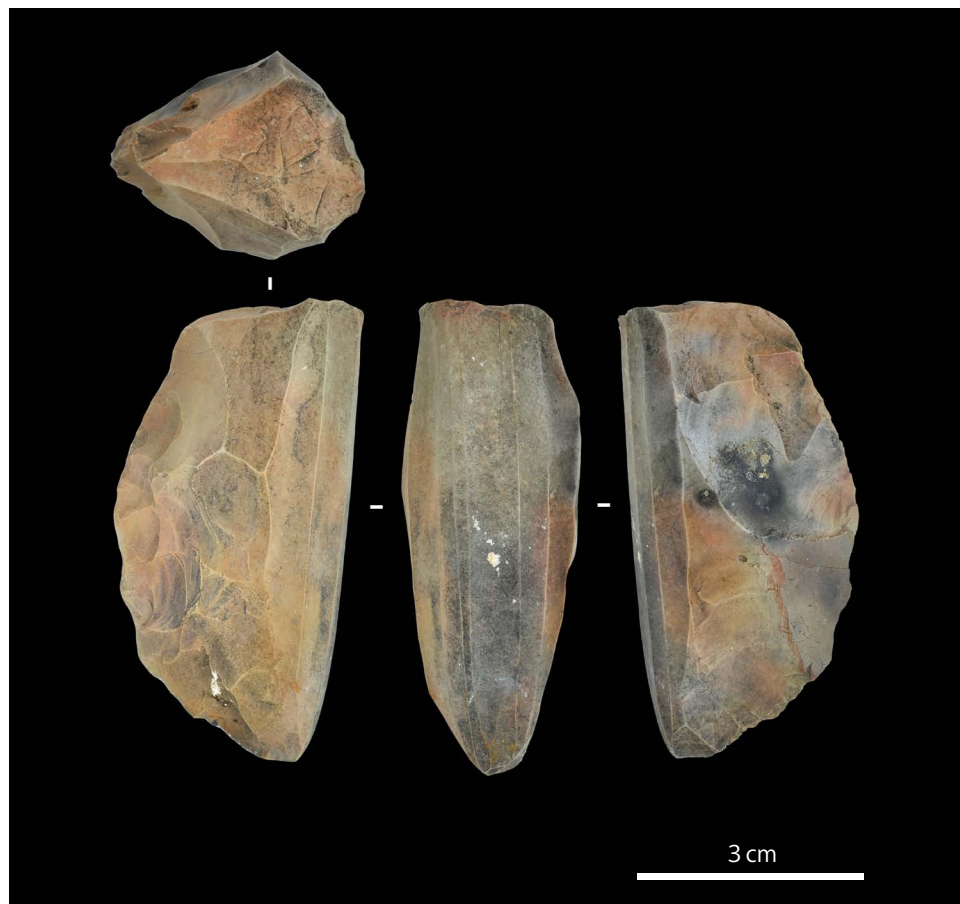
慶應義塾大学民族学考古学研究室



大山柏の旧石器関係著作

明治の元勲、大山巖の次男として1889年に生まれた大山柏は、陸軍士官として留学したドイツで、旧石器時代を中心とする本格的な考古学を学んだ。1924年、留学を終え自宅に史前研究室（後の大山史前学研究所）を設立した大山柏は、『歐洲舊石器時代』・『歐洲舊石器時代（続編）』（1929）を皮切りに、欧州の最新の旧石器時代研究方法を示す多くの著作を発表した。また岩手県の洞穴遺跡を対象に日本の旧石器文化の探索も行っているが、その発見には至らず、『日本旧石器文化存否研究』（1932）ではその存在の可能性を示すにとどめ、慎重な姿勢をみせている。

1928年に陸軍を辞した大山は慶應義塾大学講師となり、隔年で「基礎史前学」を開講、講義録は後に『基礎史前学 第一巻』（1944）としてまとめられたが、旧石器関係の講義の際にはテキストとして『歐洲舊石器時代』も用いられたという。（渡辺丈彦）

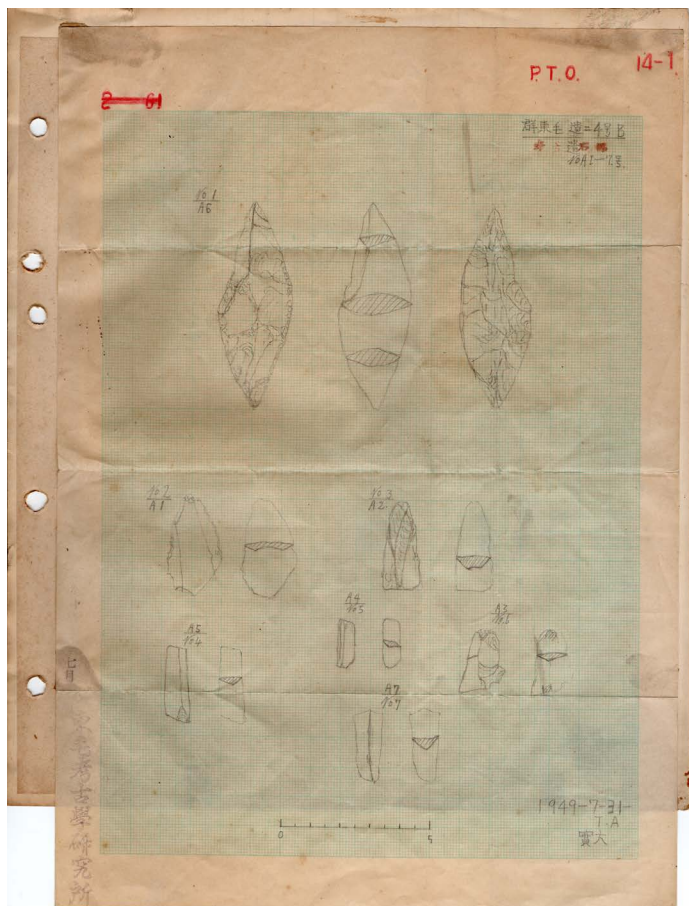


焼失した考古学教室から回収された旧石器

三田キャンパスは、1945年5月24～26日の空襲により大きな被害を受け、その際、西門入って左にあった考古学教室も全焼してしまった。そこは、大山柏が講義を行い、氏の収集資料をはじめ多くの考古学資料が収蔵されていた場所であった。この石器は、焼け跡の回収遺物のなかから見つかったもので、全体にみられる黒や赤のくすみ、白い漆喰の付着、細かなヒビ割れは、本資料が高温にさらされたことを物語っている。

両面加工石器素材を用いた珪質頁岩製の細石刃核である。上面には、打面形成のための入念な加工がみられる。小規模な剝離痕の多い左側面に対し、右側面は主に大きな剝離痕と原礫面で構成され、加工度合が異なる。本石核は細石刃剝離の痕が滑らかで、サイズも大きく減少していることから、細石刃製作の完了後に廃棄されたと考えられる。

出土地は不明だが、石材と石器の特徴からみて、東日本の旧石器と考えて間違いはない。つまり、大山柏の手元には、すでに旧石器が存在していたことになる。（安藤広道・平澤 悠）



相澤忠洋による岩宿遺跡採集石器の実測図

この図は、慶應義塾大学名誉教授清水潤三の残した書類のなかから見つかったものである。相澤忠洋が群馬県岩宿遺跡で発見した7点の石器の実測図で、「東毛考古學研究所」の印と、「T. A」のイニシャルから、相澤本人の手による図であることがわかる。日本に旧石器時代遺跡はないとされていた1946年秋、相澤は岩宿の切通しの関東ローム層内から石器と思しき石片を見つけ、1949年7月には石器と確信しうろ黒曜石製尖頭器を発見した。専門家の意見を聞こうと考えた相澤は、7月27日に、大山柏から考古学を学んだ清水潤三の自宅を訪ねる。しかし清水が不在だったため、近所の江坂輝彌の家に挨拶に行くと、そこで偶然、明治大学の芹沢長介に出会う。この出会いが、9月の明治大学による岩宿遺跡の発掘につながるのである。

相澤による石器の実測図はほかに知られていない。日付は芹沢に会った4日後の7月31日。図が清水の手に渡った経緯は不明だが、封筒に入れられていたような折り目があることから、清水に改めて意見を聞こうと特別に実測し、送ったものとも考えられる。(安藤広道・渡辺丈彦)



お仲間林遺跡（山形県西村山郡西川町）

最上川水系寒河江川の右岸段丘上、標高 283m の位置に立地する旧石器時代終末期の開地遺跡である。遺跡は 1976 年に宇野修平氏により発見され、以後、1979 年に山形学術総合調査会、1986・1992・1993 年に慶應義塾大学、1993 年に山形県埋蔵文化財センターが発掘調査をおこない、1 万点を超える石器が出土した。遺跡の直下を流れる大入間川に豊富に産出する珪質頁岩を用いて、大規模かつ集中的な石刃生産が行われた原産地遺跡であり、出土した定形的石器にはナイフ形石器、彫刻刀形石器、搔器などがある。またこれに加えて、搬入された珪質頁岩原石、接合資料、石刃石核、石刃、大小様々な剥片類などが多数出土し、それを用いて石刃技法による石器製作工程のすべてが復元されている。ここで生産された定形的石器や石刃の中で特に良質なものは、遺跡外に搬出されその後の遊動的狩猟採集活動を支えたと考えられる。

（石本のえる・上野素希・鈴木帆奈・飛戸宏太・三上 遥）

ナイフ形石器

動植物の切截や、木製の柄に装着し槍先として用いられた道具である。典型的な資料は、素材となった石刃の形態を大きく変えることなく、基部の両側縁のみに急角度の二次的加工をおこなう「東山型」ナイフ形石器の範疇に入るものである。一方、基部に加えて片側縁の上部にも調整を施す資料もあり、二次加工の部位や平面形状にはある程度のバリエーションも見られる。

(飛戸宏太)



搔器

動物の皮から脂肪を搔き取ったり、削り取ったりする皮なめしの道具である。使用石材の多くは珪質頁岩であるが、玉髄・黒曜石を用いる資料もある。素材には石刃を用いたものと、厚みのある剥片を用いたものがある。いずれも素材末端部を中心に裏面から正面にむけて連続的で急角度の剥離をおこない、刃部を形成する。また石刃を素材とした資料の中には末端部以外に側面にも加工を施すものもある。

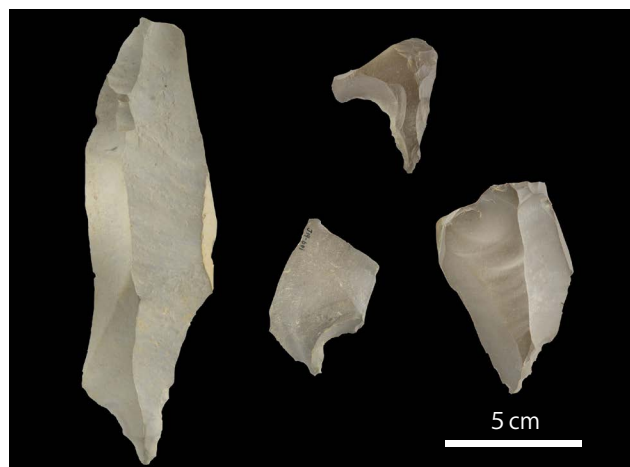
(上野素希)





彫刻刀形石器

骨角器製作などに際して削る作業などに用いられた道具である。本遺跡出土資料の石器石材はいずれも珪質頁岩であり、石刃素材のものが多い。素材の縁辺付近を削ぐように剥離された細長い槌状面の端部を作業刃部とする。彫刻刀面作出時の打面は、素材の折面を用いる資料が多く、「小坂型」に分類される。また素材の一側面全体に急角度のスクレイピングエッジを形成するなど複合的な機能をもつ資料もある。
(鈴木帆奈)



錐 器

木や革などに孔を開けるための道具である。本遺跡出土資料はいずれも珪質頁岩製であり、素材には比較的大型の石刃を用いるものと、小型の不整形剥片を用いるものがある。いずれも素材端部の両側縁から挟り状の加工を施し、錐状の尖端部を作出する。

(三上 遥)

石刃石核

定形的石器の素材である石刃を剥離し終えたのちに廃棄された残核。いずれも珪質頁岩製である。最終的な残核の形状は柱状またはやや厚めの葉状のものが多く、両設打面の石核が主体を占め、打面再生・打面調整も頻繁に行われている。良質な石質の石核はそうでないものに比べて小型になるまで消費される傾向がある。



(石本のえる)



石 刃

石刃技法を用いて石刃石核から規格的に剥離された縦長の剥片。幅に対する長さの割合が概ね2以上で、両側縁がほぼ平行、断面は台形に近い形状をもつ。お仲間林遺跡ではナイフ形石器、搔器、彫刻刀形石器など

定形的石器の素材剥片として用いられる。一方、二次加工は施されないものの、縁辺部に使用に伴うとみられる微細剥離痕をもつ資料も多く、未加工のまま切截具などとして利用された可能性もある。

(飛戸宏太)



接合資料

珪質頁岩原産地遺跡という性格を反映し、元の原石に近い状態まで復原された接合資料が多数出土した。展示資料はその代表例であり、合計 47 点の石器が接合している。摩滅の進んだ、やや厚みのある葉状礫を素材とし、まず原礫面の除去と粗割を行い、全体の形を柱状に整える。その後、柱状素材の両小口面への打面形成、打面調整、複数回の石刃剥離という工程を繰り返す、最終的に 380g 程度の石核になった段階で剥離作業を停止している。接合資料中の空隙部分には比較的形態の整った石刃が存在していた可能性が高く、それらは遺跡外に搬出されたものと推定される。

(石本のえる)



上野A遺跡（山形県西村山郡西川町）

最上川水系寒河江川の右岸段丘上、標高 286m の位置に立地する旧石器時代終末期の開地遺跡である。慶應義塾大学により 1986 年から 1998 年にかけて 5 回の発掘調査がおこなわれ、7 万点を超える石器が出土した。遺跡の直下を流れる大入間川を挟み対岸に位置するお仲間林遺跡と同様に、周囲で豊富に産出する珪質頁岩を用いて、大規模かつ集中的な定形的石器の生産が行われる原産地遺跡であり、出土遺物の中心は尖頭器及びその製作に関連する資料群が占める。尖頭器の多くは未成品あるいは破損品であり、完成に至ったものの多くは遺跡外に搬出されたと推定される。一方、本遺跡で多く出土した定形的石器の一つに多様な素材・完成形態をもつ彫刻刀形石器がある。その中には遺跡内での実際の使用を経たのちに遺棄（廃棄）されたと推定される資料も多く、本遺跡に石器製作以外の機能があったことが伺われる。

（小谷部 優）



尖頭器

木製の柄に装着し槍先として用いられた道具であり、いずれも珪質頁岩製である。礫または分割礫を素材とし、大型・幅広で厚みが大きく、全体に対称性が低い資料と、剥片を素材とし、精緻な二次加工により薄手・小型に仕上げられた資料がある。前者は整形の初期段階で製作を断念したものであり、後者は破損している資料が多く、整形の最終段階で器体が切損し廃棄されたものと考えられる。

(江原聡子)



彫刻刀形石器

骨角器の製作などに際して削る作業に用いられた道具。いずれも珪質頁岩製である。素材の形態は多様であり、縦長剥片・不定形剥片を用いるものと、両面加工石器あるいは搔器など定形的石器を転用したものがある。また彫刻刀削片が接合する資料が多くあることから、遺跡内での使用、作業刃部である彫刻刀面の再生がおこなわれていたこともわかる。

(大山実春・榎本歩美)



石 核

定形的石器の素材となる縦長剥片を剥離し終えたのちに廃棄された残核。いずれも珪質頁岩製。石核の素材は礫・分割礫・剥片の3種類があり、最終的な残核の形状は柱状またはやや厚めの盤状のものが多い。打面と剥片が剥離される作業面との位置関係が固定的な資料が多く、打面転移の頻度は少ない。個々の打面は単剥離面のものが多く、打面調整の頻度も著しく低い。
(岩浪雛子)



接合資料

本遺跡の接合資料は、元の珪質頁岩原礫を二ないし三分割して、それぞれの素材分割面を打面に連続的に縦長剥片剥離をおこなうという素材剥片製作工程を示す資料が多い。今回は典型的な資料2点を展示した。いずれも縦長剥片剥離の途中段階までは、石核の打面位置は一定で打面調整もほぼおこなわれないが、左の資料は工程が進行し石核が小型化した段階で、打面転位や打面調整がおこなわれている。
(山根宏斗・高見駿介)



尻労安部洞窟（青森県下北郡東通村）

尻労安部洞窟は、青森県下北半島東北端、桑畑山東南麓標高 33m の海岸段丘上に立地する石灰岩洞穴遺跡である。現在の洞穴は、石灰岩採掘の影響などにより間口 3.3m、奥行き 2.5m、岩底高 2.0m の岩陰状の形状をなすが、当初は幅・奥行き共により大型であったと推定される。遺跡は 1963 年前後に、日本考古学協会洞穴調査特別研究委員会の調査研究活動の一環として中島全二氏らによって発見され、2001 年からは慶應義塾大学民族学考古学研究室を中心とする尻労安部洞窟発掘調査団によって継続的な発掘調査が行われている。これまでの調査により、地表下約 3.5m に至る 16 層を確認した。このうち旧石器時代の文化層が確認されたのは 13～15 層であり、人工遺物としてはナイフ形石器 2 点、台形石器 1 点、二次剥離剥片 1 点、剥片類 1 点が出土した。これに加えて、自然遺物としてノウサギ、ヘラジカ、ヒグマ、カモシカ、ムササビなどの動物骨が出土している。本州以北の洞窟において、動物骨と人工遺物が確実なかたちで共伴した初の事例であり、日本列島旧石器時代における狩猟のあり方を考える上で大きな成果を残した。

（野口理加・羽鳥真帆・関根章史）



ナイフ形石器

動植物の切截や、木製の柄に装着し槍先として用いられた道具である。本洞窟からは2点が出土した。いずれも珪質頁岩製の縦長剥片を素材とした二側縁加工ナイフ形石器であり、一側縁の中ほどに作出された肩状の張り出しが特徴的である。両資料共に使用にともない先端部が欠損している。類似する資料は山形県新庄市上ミ野A遺跡などにあり、その所属年代は2.8～2.5万年前頃とされている。

(安藤啓明・鈴木伸太郎)



ヤバオオツノジカ下顎骨

尻労安部洞窟の至近に位置する石灰岩鉱山旧坑道址発見の資料と伝えられる。長らく八戸市博物館に貸与されていた本化石資料が2001年に慶應義塾大学民族学考古学研究室に返還されたことが、尻労安部洞窟発掘の契機となった。資料裏面に注記された「尻労」が日本有数の石灰岩地帯にして、物見台遺跡をはじめ複数の旧石器時代遺跡も擁する下北半島北東部の集落名であることを確認し、阿部祥人らは同集落後背の桑畑山南麓に注目。踏査を経て尻労安部洞窟の発掘調査に着手した。

(羽鳥真帆)



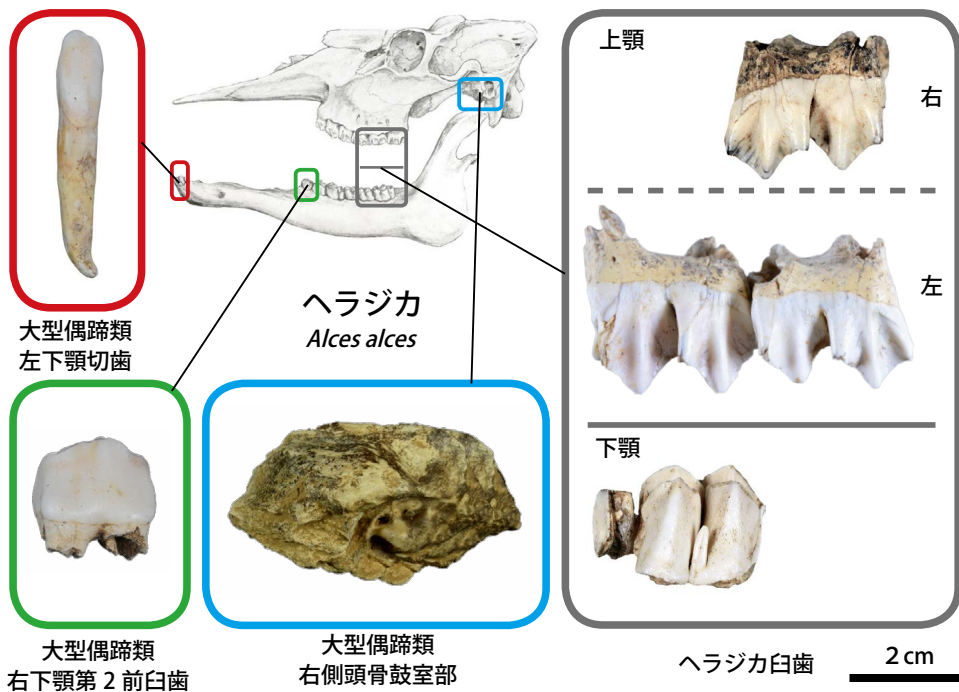
台形石器

ナイフ形石器と同様に、木製の柄に装着し槍先として用いられた道具と考えられる。縦長剥片を素材とし、その打面部側と基部側をそれぞれ折り取り、その切断面に連続的な二次加工を施すことによって全体形状を台形に整えている。刃部に複数みられる微細剥離痕は使用にともなうものと考えられる。類似する資料は北海道上磯郡知内町湯の里4遺跡で見つかっており、その所属年代は2.3万年前頃とされている。（菊池早貴・鈴木伸太郎）



ノウサギ

旧石器時代の層準から出土した動物遺体の大半を占める。ナイフ形石器の周辺に多出したこと。また、ノウサギは元来洞窟内に生息域も求めないこと。それらの事実は、同遺体が旧石器時代人の猟果に由来することを示唆してくれる。日本各地にみられる民族誌の事例に鑑みるなら、ノウサギの狩猟には罾あるいは威嚇具が用いられた可能性も指摘できよう。さらに当該期が最終氷期最寒冷期であることを踏まえれば、ノウサギ猟の主たる目的が毛皮利用にあったことも考慮すべきかもしれない。（伊東 栞）

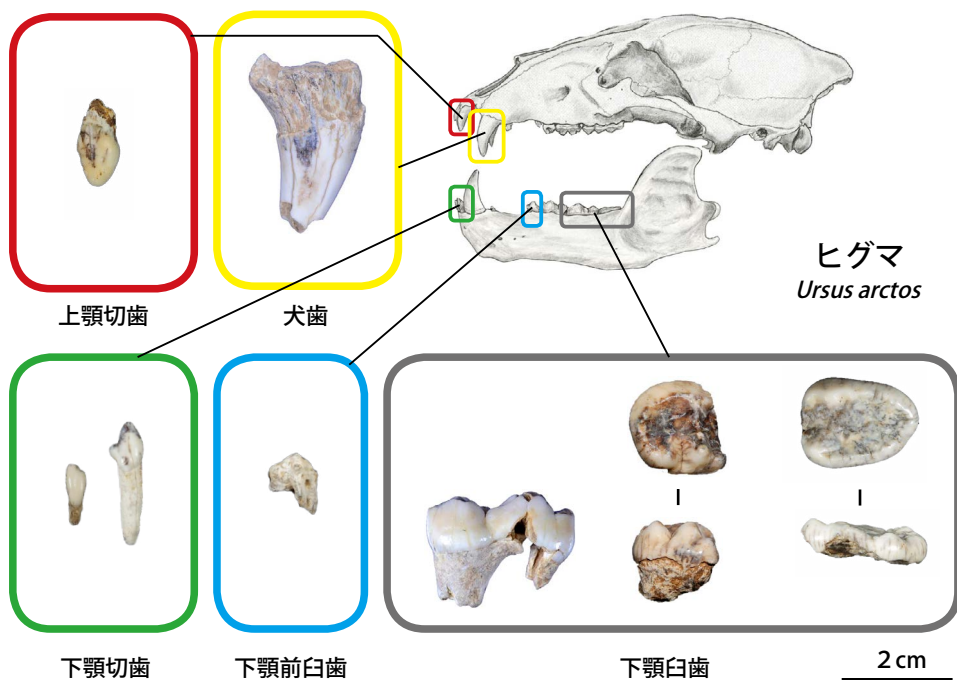


頭蓋骨・下顎骨イラストは Gilbert, B.M. (1980) より転載

ヘラジカ

体長が3mを超えるシカ科の最大種で、雄の成獣は箆状の大角をもつ。今日ユーラシアおよび北アメリカ大陸のタイガ（高緯度針葉樹林帯）に分布する同種は、後期更新世、本州中部地域以北の日本列島にも生息していたとみられる。ヘラジカ化石は、これまで花泉遺跡・風穴洞穴（岩手県）、野尻湖立が鼻遺跡（長野県）、熊石洞（岐阜県）からも出土しているが、本洞窟の資料は日本列島最北の発掘例に当たる。

（坪井美里）



頭蓋骨・下顎骨イラストは Gilbert, B.M. (1980) より転載

ヒグマ

体長約 3 m、体重約 300 kg を超えるクマ科の最大種であり、ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の森林地帯に分布する。本州以南の日本列島では地域絶滅したものの、今日なお北海道にはエゾヒグマが生息している。尻労安部洞窟出土化石については、歯種が重複せず咬耗も同程度であることから、同一個体に由来すると考えられる。また X 線 CT スキャンによる犬歯の成長線分析の結果からは、この個体が生後 3 度目の冬眠前に狩られたことも判明した。

(椎谷舞萌)



【ご協力（敬称略）】

相澤千恵子（相澤忠洋記念館）

會田容弘（郡山女子大学短期大学部）

佐藤康之、筒井敬子、倉持 隆（慶應義塾図書館）

澤浦亮平（東北大学大学院歯学研究科）

【共 催】

慶應義塾大学文学部

【研究助成】

2013～2015 年度科研費『本州最北部における更新世人類集団の学際的調査・研究』（研究代表者：佐藤孝雄）

【展示参加者】

平澤 悠、藤澤綾乃、大西 凜、服部太一、臺 浩亮（慶應義塾大学院文学研究科）

小谷部 優（慶應義塾大学文学部）

安藤啓明、石本のえる、伊東 栞、岩浪雛子、上野素希、上保利樹、榎本歩美、江原聡子、大山実春、菊池早貴、椎谷舞萌、鈴木伸太郎、鈴木帆奈、関根章史、高見駿介、坪井美里、飛戸宏太、野口理加、羽鳥真帆、三上 遥、山根宏斗（2015 年度 民族学考古学研究法受講者）

文学部創設 125 年記念企画展

氷期に生きた北の狩人

— 慶應旧石器時代研究 88 年の歩み —

2016 年 1 月 8 日 印刷

編集：佐藤孝雄、安藤広道、渡辺丈彦

発行：慶應義塾大学民族学考古学研究室

〒108-8345

東京都港区三田 2-15-45

印刷：（有）梅沢印刷所